

## 私のイタリア紀行（二）

長谷川 修

（承前）国内旅行の四つの街は、全て初めての土地だ。今回はアッシジとフィレンツェについて記す。

### アッシジ

アッシジは丘の中腹にある静かな街で、麓にはブドウ園とオリーブ園が拡がり、世界の雰囲気が残る。

聖フランチェスコの生誕と終焉の地であり、今も巡礼者が列をなす。「フランチェスコ大聖堂」は、地下に墓廟、一階が聖堂、二階はジョットの大作「聖フランチェスコの生涯」二八場面と、人を圧する巨大な教会だ。ただゲートはこの大聖堂を大きくだけて陳腐であるとし、むしろ近くのギリシャ神殿に興味を示した。

ウンブリア州の里山料理は、ナポリ湾の海鮮料理とは大きく異なる。野兔や鳩の肉、羊豚のハム、トリユフを食したが、小動物に優しかったフランチェスコはどう思っただろうか。

### フィレンツェ

フィレンツェは街中が美術館みたいだ。なかでもウッフィツィ美術館はメディチ家が収蔵した作品を中核とし、ルネッサンス美術の宝庫だ。

ボッティチェッリの「春」と「ヴィーナスの誕生」から始まり、ダ・ヴィンチの「受胎告知」を経て、ミケランジェロの「聖家族」とラファエロの「ひわの聖母」が並んで展示され、カラヴァッジョの「バツカス」「メドゥーサ」と続く。カラヴァッジョの作品は初期のもので、少年や静物を描く。

当日は朝一番のネット予約が取れていたものでゆっくり回れた。館内にはくつろげるカフェがあり、また写真を撮ることも自由で、楽しめる美術館だ。

街の中心にあるドウオーモ、ヴェッキオ宮、シニョリア広場等は観光客で大混雑だった。喧騒を避け、郊外のミケランジェロ広場から街の全貌を眺め、アルノ川沿いを散策する。

須賀敦子のエッセイ「フィレンツェ、急がないで、歩く、街」では、フィレンツェから何でも持って帰りたいものをと勧められたら、ボボリ庭園、ピティ宮殿、アンジェリコの絵画等を挙げている。

メディチ家の繁栄は二百年に満たないが、その間の財力の集中と残した遺産の豪華さには眩暈を覚えた。